

# 第91回アカデミー賞®ノミネート 衣装デザイン賞/メイクアップ&ヘアスタイリング賞

## 恋愛、結婚、出産、プライド、嫉妬、陰謀、権力争い……。 エリザベスI世のライバル、メアリー・スチュアート ふたりの女王の波乱に満ちた人生を見よ

激動の16世紀英国を生き延びたメアリー・スチュアートとエリザベスI世の波乱に満ちた人生を描いた映画『ふたりの女王』メアリーとエリザベスが3月15日(金)から全国公開となる。シアーシャ・ローナン、マーゴット・ロビーという今最も旬な女優の演技バトルによってこれまでにない歴史ドラマに仕上がっている。小説家・林真理子さんも本作を観る前から気になっていたようだ。実際に鑑賞していただき、本作に感じた魅力、見どころをうかがった。

### 対照的な女性ふたりの悲劇 どちらの生き方も心を打つ

舞台は16世紀のヨーロッパ。様々な陰謀、策略が渦巻き、内乱殺戮が繰り返されるという時代です。そんな弱肉強食の世界に翻弄され続けたのがメアリー・スチュアートとエリザベスI世。本作は、史実をもとに描かれた女性君主ふたりの悲劇の物語です。ただ、その運命はあまりに対照的。どちらの生き方にも心打たれる一方、この違いは何だったのかと深く考えさせられました。

スコットランド女王のメアリーは、16歳でフランス王妃になるものの、18歳で未亡人となって故郷スコットランドに帰国、再び王位の座に就きます。恋愛、結婚、出産も経験。血筋の良さに誇りを持っており、プライドも高く、高潔で大胆。しかしその性格があだとなり、非業の死を遂げることに。エリザベスは3歳の時に母が父に処刑されたことで庶子と見なされ、以後、苦勞を重ね、25歳で国王に即位します。「私は男で国家を守ることに大切」と宣言し、国家統一に全力を注ぐ。生涯結婚しなかったのは、世継ぎを巡る紛争や派閥争いを避けたかったんだと思います。彼女もプライドは高かったのですが、メアリーと違うのは、時と状況に合わせて自分のプライドを出し入れし、男たちの謀略を見事にかわしてきたこと。それによって45年もの間、女王として君臨するわけです。いつ殺されるか分からない時代にあつてこれはすごいことです。

### メアリーの真つすぐさは 現代なら十分通用する

メアリーとエリザベス。それぞれの自分の貫き方があって、カッコよくて魅力的。ただ、個人的にはメアリーの真つすぐな生き方に惹かれました。どんなに反感を買っても、自分の主義主張を貫く。あまりに正攻法すぎて刑に処されるわけですが、その瞬間でさえ自分らしさを貫き、真つ赤なドレスで臨みます。その一方で、孤独なエリザベスに対し、時に侍女たちとガールズトークを楽しむひとときも。まさに公私ともに自由奔放。そこも好きですね。

ただ、あの時代だったから自分のやりたいことを貫くのは難しかった。でも、現代ならメアリーの自由で真つすぐな生き方も十分通用します。もちろんエリザベスの生き方も素晴らしい、特に立ち居振る舞い、判断力には目を見張るものがあります。ですから、メアリーかエリザベスかの二者択一ではなく、両方のいいところ取りをして人生を歩めばいいのではないかと。今はそれが可能な時代です。

### 歴史を知ると面白い 本作は心に残る史劇

本作は映像も素晴らしい、衣装や髪形など細部にいたるまで忠実に再現されています。印象に残る

## 500年前の物語なのに、現代を生きる我々に訴える。クライマックスは深く心に響きました

シーンも多いですね。メアリーが馬に乗って闊歩するシーンも好きです。後ろにイケメンの臣下をたくさん従えて堂々と突き進む姿には、胸をすく爽快感があります。そんな中、最も私の心に焼きついたのは、メアリーとエリザベスが森の中で密会し、直接対決するシーン。最大のクライマックスなのですが、演出が素晴らしい、セリフも心に響きます。ふたりが密

会したという史実は記録に残っていません。だからといって本作を否定する必要は全くありません。私も歴史小説を書く際、外側はできる限り史実で固めますが、中の会話は自由に書かせてもらっています。でも、そこが一番面白いし、本質的なテーマや作品の魂を感じるところ。事実、このシーンからはふたりの女性君主の本音、苦悩がひしひしと伝わってきます。一



小説家  
**林 真理子**さん  
はやし・まりこ/1954年山梨県生まれ。日本大学芸術学部卒業。コピーライターを経てエッセー集『ルンルンを買っておうちに帰ろう』を出版。女性を中心に絶大な人気を得る。『最終便に間に合えば』『京都まで』で第94回直木賞、『白蓮れんれん』で第8回柴田錬三郎賞を、『みんなの秘密』で第32回吉川英治文学賞受賞。ほか著書多数。2018年は著書『西郷どん!』がNHK大河ドラマの原作となり、紫綬褒章も受章。近著『愉楽にて』が発売中。

番の見どころだと思います。実はこの映画に興味を持ったのは、高校生の頃に『1000日のアン』という映画を観ていたからです。母アンの処刑の号砲が鳴り響く中、女の子が庭でひとり遊ぶ少女が後のエリザベスI世ですが、彼女の後の運命がずっと気になって、事あるごとにエリザベス関連の本や映画をチェックしてきました。本作はメアリーと対峙させているので、より深くエリザベスを知ることができました。私にとつての『1000日のアン』のように、本作が、誰かが歴史を深掘りしたくなる出会いの一步になるといいなと思います。余談ですが、エリザベスは織田信長より1歳年上で、メアリーは徳川家康より1歳上。そう聞くだけでいろいろ興味が湧いてきませんか？歴史を知るとって本当に面白いですよ。(談)



### STORY

生後6日でスコットランド女王、16歳でフランス王妃となったメアリー・スチュアート。未亡人となった18歳にスコットランドへ帰国し、エリザベスI世が統治している隣国イングランドの王位継承権を主張する。恋愛、結婚、出産を経験し、若く美しく自信にあふれたメアリーに複雑な思いを抱くエリザベス。誰よりも理解し合えたはずの孤独なふたりの女王たちは、いとこでありながら恐れ合い、それぞれ陰謀渦巻く宮廷の中で運命に翻弄されていくのだった……。